



書物漫遊記

種村季弘



書物漫遊記 (しよもつまんゆうき)

一九八六年五月二十七日 第一刷発行

著者 種村季弘 (たねむら・すえひろ)

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊦一〇一九一

電話東京二九一一七六五一 (営業)

二九四一六七一一 (編集)

振替口座六一四一二三三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©SUEHIRO TANEMURA 1986 Printed in Japan
ISBN4-480-02048-9 C0195

—庫—

書物漫遊記

種村季弘



筑摩書房

目次

序章	名前と肩書の研究	『潮文化人手帖』	9
1	不思議な節穴	武井武雄『戦中気候画帳』	20
2	畸人ざらい	色川武大『怪しい来客簿』	31
3	猫が食いたい	石堂淑朗『好色的生活』	42
4	吸血鬼入門	種村季弘『吸血鬼幻想』	54
5	見えない人間	『定本山之口猿詩集』	65
6	開かれた箱	坂根巖夫『遊びの博物誌』	78
7	悪への郷愁	高垣眸『豹の眼』	89

8	泥棒繁盛記	野尻抱影『大泥棒紳士館』	100
9	分家開き	谷崎潤一郎『秘密』	111
10	二階の話	古今亭志ん生『二階ぞめき』	122
11	我が闘争	吉田健一『流れ』	134
12	逃げた浅草	『正岡容集覧』	145
13	九段の怪談	内田百閒『遊就館』	156
14	見世物今昔考	江戸川乱歩『パノラマ島奇談』	167
15	大食のすすめ	武田百合子『富士日記』	178
16	接統法第二式	『木村・相良独和辞典』	189

17 ベルリッツ・スクール イヨネスコ『授業』 200

18 書かれなかった本 四方八郎『ビルマ革命の内幕』 211

19 Kilroy was here ドウス昌代『東京ローズ』 222

20 留学の成果 久生十蘭『新西遊記』 233

終章 何でもないものの魅力 武田泰淳『新・東海道五十三次』 244

あとがき 255

書目一覧 258

解説 猿飛レゲンデ 池内紀 263

書物漫遊記

序章 名前と肩書の研究 『潮文化人手帖』一九七六年版

昨年の年頭あたりからひんぴんと奇妙な電話に悩まされはじめている。

「一橋大学で教えてるんだって？」

複数の友人知己が申し合わせたようにそう訊ねるのである。当方にはまるで寝耳に水であった。

一九六五年から一九七一年まで、私は三つの大学に語学教師として勤めていた前歴がある。しかしそのいずれの大学も一橋大学ではない。一九七一年以降はいまのところ大学と名のつくものには関係していない。狐につままれたような気持である。

とこうするうちに事態はいささか深刻になってきた。新聞や雑誌にときたま談話コメントを発表することがある。するとその肩書が「一橋大学教授」となっているのである。

一体、どうなっているのだろう。私は、ある日突然、一橋大学当局から肩書詐称の件で告訴されるのではなからうか。

間違いの元凶はすぐに判明した。潮出版社が編集している『潮文化人手帖』というのがある。この手帖一九七六年版の住所録の私の名の欄に一橋大学教授と印刷されていたのである。友人からそのことを教えられたので、早速潮出版社に問い合わせた。電話口に出た担当者に事情を説明すると、相手は丁重に詫びたうえ、来年度からは必ず訂正する旨を約してくれた。ミスプリントの原因そのものは、担当者にも不明であるらしかった。

大部数が出回っているのだから、今更回収は不可能だ。私だけのために訂正表を購買者各個に郵送するとなると、かなりの出費だろう。なにも前科三犯と大書されているわけではない。不慮の事態が発生した場合、責任の所在は当方にあるのではないことを確認して頂いてから電話を切った。(手許にある一九七八年版では訂正されている・後記)

一連の怪の原因はこれで解けた。新聞雑誌の誤記は、談話を渡すとき特に肩書を言わなかったので、編集者が『潮文化人手帖』で当たったのである。

それにしても不安は不安である。編集者にも私にも落度はないとしても、結果としては肩書詐称が成立する。相手が国立大学だから、ひよつとして国家公務員法違反に問われやしないか。かりに教授会が寛容でも、大学というところには体育部もあれば学生自治会もある。血の気の多い連中が、空手や火焰ビンで天誅を加えにくる可能性がないとはいえない。薄氷

を踏む思いの日々が過ぎた。

一橋大学には出口裕弘さんという友人がいる。歴とした一橋大学教授の、ボードレールやジョルジュ・バタイユの研究で知られた気鋭のフランス文学者である。傍らこの人、小説も書く。江戸前の啖呵のきいた、胸のすくような文体で、真夏の太陽のような乾いた虚無感とふかぶかとした水の感触の対応を書き分けた『天使扼殺者』という小説の作者である。

この人に当たりを入れてみようかと思った。面倒なことになりそうかどうか。

「そんな気配はなさそうだな。あつたつてどうつてことないじゃないか」

川向こうの生れだから、出口さんは滅法威勢がいい。電話の向うで小心翼翼たる当方の俗物根性をせせら笑っているようである。話はそれで終ったが、このとき、ちよつと気になるやりとりが記憶の隅に引つ掛つた。

「おれなんか、あの手帖に学校教師の肩書でのもつてないよ」

「じゃあ、どうなってるんですか？」

「評論家とか何とかなつてたようだね」

実情としては、私と出口さんの肩書があべこべになつてゐるわけだ。すると手帖住所録の編集者が出口裕弘と種村季弘を取り違えたのだらうか。しかし住所電話番号その他はちゃんと合っているのだ。それにいくらなんでもタ行とダ行とは離れすぎていて相撲にならない。誤記の原因はやはり納得のゆかぬままである。

それはそうと、右の電話のやりとりから一週間も経たぬうちに、当の出口さんにばったり出遭った。誤記事件と直接の関係はないが、これも面白い話なので書いておきたい。

その夜は、御徒町のガード下近くのさる朝鮮料理店で、甥の立大生を相手にマツカリを飲んでた。ここは敗戦後の闇市時代からゆきつけの店である。当時は非合法だったマツカリを人間の背丈ほどもある大瓶から肥柄杓のようなものですくって飲ませてくれた。警察の手入れと見るや、この大瓶をハンマーで叩き割るのである。すると白い液体はごぼごぼと床下の暗渠を流れて、みるみるうちに便所の壺のなかへと姿を消してゆく。

そんな壮烈な見世場こそなくなったが、プルコギを焼く煙とマツカリの酸味からさえ、私にとつては当時をしのぶよすがとなるある種の雰囲気を残しているもはや数少い場所なのである。パン助と浮浪児、GIと復員兵、露天商と運び屋。暴力と血と空腹とがエネルギーなゴツタ煮となつて濛々たる湯煙を上げていた、一九四〇年代末期の界限の面影が何となく追想されてくる。どうやら得体の知れない豚の臓物をつつきながらマツカリを飲むことは、私の場合、マルセル・ブルーストの主人公が紅茶に浸したマドレーヌというお菓子を食べながら少年時を追想するのと、同じ効果を持っているらしいのである。

まあそんなわけで、年少の甥を相手に根拠薄弱なオダを上げていた、とご想像願いたい。するとそこへ、魔法を掛けて呼び出したように、出口裕弘教授が突如として姿を現したのである。顔見知りの美術雑誌の編集者を同伴しているが、両者ともすでにかなりきこしめして

いて、羽化登仙の境にましますらしい。

「タツ、タネ公ツ、てツ、てめえ！　こんなとこへ助平たらしくシケ込みやがって！」

出口教授の巻舌のお叱りを蒙るまでもなく、私は一種の恐慌状態に陥っていた。肩書誤記事件といい、知るはずもない立回り先への知人の突然の登場といい、これはどうやら私の行動が逐一何者かに監視されていて、私は得体の知れぬ大陰謀に巻き込まれているのではあるまいか。

仕掛けが割れてみると、どうということではなかった。出口さんは神田の古本屋見物の帰路、連れの編集者とゆきずりのおでん屋に入ったのである。酔うほどに照れ屋の露悪趣味が嵩じて、女性性器の俗名をナマで連発（ご当人の証言によれば「たった三回」）した。するといやにもったいぶったおでん屋の女将が、突然、「お客さん、出ていって下さい」と狐面きつねづらになった。虚を衝かれたのであった。ふだんの出口さんなら、ここでべらんめえになってとつさに切り返すところを、まさかたった三回、「オ○ンコ」と唱えたばかりにムキになる正直者が、箱根のこちら側に生息しているとは思ひも寄らなかつたのだ。

口惜しいから表へ出て立小便してやった。それをまた格子戸を開けて説教がましくジロジロ覗いてやがるじゃねえか。こうなったらもうタネ公を襲う以外にねえよなあ。

こういう観念連合は高尚なるボードレール研究においては通用しない。論理の運びがはなはだ学問的ではないからだ。おでん屋で啖呵を切り損ねた鬱憤をタネ公襲撃において晴らす、

という端倪すべからぬ想像力の働き方は、これはもう純粹に小説家のものである。彼は研究されるべき側の人物なのだ。

どうやら拙宅に電話して行先を突きとめたのである。不意打ちを掛けると、そこにマツカリでうつとりと回顧的感傷に耽っている私が出た。一方私の側にしても、もしも悪魔がその場にもつともふさわしい人間を呼び出してくれると申し出たら、まっさきに指名するであろう人物は出口裕弘さんを措いて外にはなかったと思う。なにしろ彼はこんな文章を書く作家である。

「二階の喫茶店を出たのは三時ごろだったろう。出たとたん、階段を冷たい風がどつと駆けあがってきた。その風に押しあげられるようにして、私と高杉は街路の方へではなく、逆に焼ビルの三階へ向った。すぐに階段を下りようとする私に、ちよつとこのビルを探検してみないかと高杉は誘ったのである。ことあればすかさず小心を笑われるにきまつている。私は一も二もなく賛成した。」

敗戦後の焼土のなかでの出来事である。これだけでは何のことやらわかるまいが、このあと高杉という男は、いきなり焼ビルの四階と五階の間から身を躍らせて、あの世までさつさと駆け抜けてしまうのである。

戦後も三十余年、平和にうつけたこの晩はさすがにそんな物騒なことは起こらなかった。「上海帰りのリル」を歌い、「こんな女に誰がした」を歌い、ナツメロに太平楽に呆け、河岸

を変えて拙宅で飲み直しているうちに、こちらの方が悪酔いしてきたからである。

「出口さんは、出口ヒロビロなんていい名前してるくせに、入口セマゼマみたいな高踏的な小説ばかり書いてますねえ」

性の悪いからみ方であった。深更近く、出口さんは出現したときと同様、風のごとく消え失せた。見ればあとには、主を失った刑事コロンボ風のレインコートがわが書斎脇の掛釘に夢のなかの物体のようにぐんやりと吊る下っている。正体をつかまえたと錯覚させておいて、脱殻だけ残して、本体はどこかへ突っ走ってしまっているその呼吸が、彼の作中人物と瓜ふたつであった。

さて、これまた目下の話題とは何の関係もないが、それからまた数日経って、これも偶然、日本橋のある画廊で詩人の窪田般彌さんにお目に掛った。この人も早大教授のフランス文学者である。窪田さんは最近『ジョルジュ・ローデンバツハの『死都ブリュージュ』の新訳を発表され、幸運にも私は一冊を献じられている。そのお礼を申し上げてから、何となく私はこう口走った。

「そういえば、四、五日前、出口さんにお目に掛りました」

何をもつて「そういえば」なのか。しかし、この観念連合は説明が可能である。

まず窪田さんが訳されたローデンバツハというベルギー人作家の『死都ブリュージュ』なる小説は、市中いたるところに閑雅な運河をめぐらしたフランドルの古都ブリュージュが舞